

地域の多様性をつなぐメディア実践

—アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンのメディア表現者たち—

西川 麦子

はじめに

この論文では、アメリカ合衆国、イリノイ州、Urbana-Champaign (U-C, 東西に隣接する2市)¹⁾において、住民組織や個人が、地域限定のパブリック/ローカルなメディア（コミュニティラジオやパブリックTVなど）とパーソナル/グローバルなメディア（インターネット利用など）を組み合わせ、地域を拠点とした活動をどのように展開しているか、現地での参与観察と筆者のメディア実践をもとに紹介する。

筆者は、2011年4月よりアーバナにあるコミュニティラジオ WRFU-LP104.5FM において日本語番組を担当している。アメリカのコミュニティラジオの制度の変遷や近年の動向、WRFU の開局（2005年）の経緯とその後の展開については、西川（2012, 2013a）で述べた。WRFU は、地域においては比較的新しいコミュニティ・メディアであり、調査地では住民が主体となり発信することができるメディア²⁾が、他にいくつもある。シャンペーンにある WEFT90.1FM も NPO のコミュニティラジオ局であり、1981年から放送を開始し、現在は10000ワットの出力をもち、イリノイ州中東部の複数の郡をカバーする（西川 2013a）。アーバナにある Urbana Public TV (UPTV) は、全米で3000以上ある PEG チャンネル（津田 2011：75）³⁾の1つで、1995年に開設された。この他、イリノイ大学 U-C 校やパークランド・カレッジの放送局もある⁴⁾。住民たちはそれぞれの目的に合わせて、1つの、あるいは複数の媒体を利用して各自のメディア活動を展開している。

近年はまた、情報コミュニケーション技術が発達し、ラジオやテレビといった公共のメディアを利用しなくても、個人が自分で取材し、音声や映像を編集してインターネットを使い地域内外に広く発信できるようになった。コミュニティ・メディアとよりパーソナルなメディアとの組み合わせ方も多様になっている。こうした状況のなかでは、コミュニティ・メ

ディア研究においても、その地域において特徴的なコミュニティラジオ局やテレビ局を個別に紹介するだけでなく、それらを含むメディアをめぐるより複雑な環境において、既存の制度や仕組みを利用しながら、人々がどのように多様なメディアを使い活動を展開し地域と関わっているかをとらえる視点が必要となる。

水越伸（2005）では、「メディア・ビोटープ」⁵⁾という概念を提示し、1980年代以降のグローバルなデジタル・メディア社会状況、とくに90年代以降にインターネットが一般の人々に開放された状況において、マスメディアとは異なる、市民が主体となるメディア表現活動やオルタナティブなメディア文化の展開の可能性を実践的に探っている。水越が試みているのは、表現/発信とコミュニケーション・ツールとしてのメディアを、個人や地域、あるいは人と人とが結びつく営みからとらえなおし、国家的な、あるいはマスメディア企業による体制が主流となっている日本のメディアをめぐる環境を変えてゆく実践である。そこで、地域にメディア生態系をつくる要となるのが、「新しいメディア表現者」である（水越 2005：129-133）。水越は、「メディア表現者」⁶⁾という言葉に、「『マスメディア時代の送り手と受け手』という図式自体を乗り越え、消費者や利用者という立場を超えて、メディアに関わる人間像の全体性を回復しよう」という意図を込めている（水越 2011：31）。

本論文では、水越のいう「メディア表現者」に注目しながら、調査地におけるコミュニティ・メディア利用の事例を具体的に紹介し、地域に根ざした小さなメディアの特質をとらえていきたい。ここで扱うメディアは、コミュニティラジオやパブリックTVなどの地域限定の放送や、インターネット、フライヤー、ポスター、ニューズレター、新聞などの紙媒体、地域の人々が参加するイベントなど、広い範囲を含む。

以下の1章では、筆者がアメリカでメディア実践を行うにいたる経緯と、現在も担当しているイリノイ州のコミュニティラジオ番組を扱い、インターネットを利用して日米をつないだ日本語トーク番組の活動を紹

介する。特定の地域をこえたコミュニティ・メディアの利用の可能性と難しさを考える。2章では、調査地域におけるコミュニティラジオやパブリックTVなど複数のコミュニティ・メディアとインターネットを利用した活動を紹介し、住民が同じ地域内にある異なるメディアをどのようにつないでいるのかをとらえる。3章では、同地域の移民問題を扱う複数団体による「移民フォーラム」の活動をとりあげ、多様なメディアを駆使し、不法滞在者を含むさまざまな立場の人々にどのように情報を伝え、地域の人々を動かしつつ、地域外と連携しながら運動を展開しているのかをみる。4章では、1～3章の事例をふまえ、地域に根ざした小さなメディアの特質とメディア表現者の役割を考察し、本論文のまとめとする。

1 Harukana Show—スタジオを拠点としたグローバルなコミュニティラジオ番組

1-1 都市の地域コミュニティ形成の研究からメディア実践へ

筆者のアメリカでのコミュニティ・メディアの研究は、2001年から開始したロンドンでの都市コミュニティ研究の延長線上にある。多様な出身の人々が集まり移動する匿名性の高い都市空間において、住民たちが「コミュニティなるもの」に何を求め、どのような方法で住民意識を育み、地域社会を創造していくのかを、1990年代以降、ジェントリフィケーションが進んだ都心の一区域（人口1万人あまり）で、事例研究を行ってきた。そこでは、「インターネットを活用した住民間の情報ネットワーク作り」と「地域を拠点とした諸プロジェクト（防犯、落書き消し、植樹・緑化運動、季節のイベントなど）のプロセスと成果の可視化」によって、近隣住民の関係が生み出されていった（西川2009, 2010）。

また、現在の住民組織作りに影響を与えた1960年代のロンドン、Notting Hill (North Kensington) での先駆的なコミュニティ活動や対抗文化活動について、当時の活動家たちへの取材をすすめるなかで、「住民が自分たちの発信、表現手段」をもつことを重視して活動が展開されていたこと、運動やメディアにたいする考え方や方法が、1950年代後半から60年代にかけての「アメリカでの草の根運動」から影響を受けていることを知った（西川2013c）。アメリカの「草の根運動」について現地で学びたいと考え、勤務大学からの在外研究の機会を得て、2010年9月に渡米し、イリノイ大

学に1年間在籍した。

滞在したアーバナ市のダウンタウンにNPOのコミュニティ・メディア&アート・センター (Urban-Champaign Independent Media Center: UCIMC) があることを知り、「誰でもメディアになれる」というコンセプトに関心をもった。UCIMCの活動プロジェクトの1つが、コミュニティラジオ WRFU-LP (通称ラジオ・フリー・アーバナ, WRFU と記す) であった。住民が自由に発信できるラジオ局の存在は興味深かったが、「コミュニティ」ラジオ (メディア) は、外国人である私には関わりにくいと考えていた。また、この地域に日本人コミュニティと呼べるほどの人口もまとももない。そもそも、英語を使いこなせない人間がラジオの活動に関わることができるのだろうか。

そんな疑問をもちながらも、WRFU や UCIMC の集会やイベントに通い始めた。そして、日米をオンラインでつなぐ日本語トーク番組ならできるかもしれないと考え、WRFU の関係者と日本在住の知人に番組参加をお願いし、2011年4月に Harukana Show を開始した（西川2012）。その後、番組には新たな現地スタッフが加わり、私は帰国した後も日本から毎週の番組制作に携わっている。

海外で自分がマイノリティの立場となったときに抱いたコミュニティ・メディアにたいするある種の疎外感が、「当事者が主体となるメディア」とは何か、そこでの「当事者」とは誰か、といった問題を考える契機となった。アメリカでのメディア実践をとおして、現代においても、1960年代のロンドンにおけるさまざまな草の根運動においても、「自分たちが情報発信手段をもち、それが、人と人が関わるコミュニケーション・ツールとなること」が、さまざまな立場の人々を巻き込み草の根運動を展開していくうえで重要であると改めて気づくことになった。

この論文でも、地域に根ざしたメディアを人々がどのように利用し、そうしたメディアがどのような「情報発信」手段であり、かつ「人と人が関わる」手段となりうるのか、という視点から、アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンにおける事例をみていく。

1-2 コミュニティ・メディアをグローバルに開く

Harukana Show は、WRFU において、2011年4月から始まった日本語番組である。2014年2月7日時点で、150回の放送を重ねた。現地時刻で金曜日夜6時から7時という放送時間は、開始当時から変わってい

ない。WRFU の出力は100ワット、2012年11月に65フィートの電波塔が100フィートに建て替えられ、電波が届く範囲は、半径6.5kmほどであったものが、10km程度まで拡大した (Chynoweth 2013, 西川 2013a)。アーバナと隣接するシャンペーンが、聴取エリアの中心となるが、両市の12万人あまりの人口のうち、日本人は0.3%にすぎない。

この地域は、イリノイ大学 U-C 校を中心とした大学街であるが、大学での日本語学習者や日本研究者、仕事で日本に滞在した経験がある人を含めても日本語を理解しうる地域内の人口は限られる。また、大学関係者は学生を中心に、毎年、人口の一定の割合が転出入する。日本からの留学生の数は減少傾向にあり⁷⁾、企業、大学等から派遣される場合は1～2年という短い期間である。日本人は、地域においても、イリノイ大学においても、もっとも小さなマイノリティグループである。

こうした状況のなかで Harukana Show は、日本人のみを対象としたラジオ番組ではなく、アーバナ・シャンペーンにおいて、日本と関わりをもつ人々 (大学で日本語を学ぶ学生や日本文化に関心をもつ人々、留学や就学などによる日本滞在経験者など) を対象としている。またラジオ放送とインターネットを組み合わせ、アーバナ・シャンペーンをこえたアメリカや日本をつなぎ地域限定のコミュニティ・メディアを外へ開く試みでもある。

Harukana Show の番組スタッフは、WRFU の他の番組と同様、すべてボランティアであり、仕事や生活時間の合間をぬってスタジオ (写真1) に駆けつけ、あるいはオンラインで番組に参加している。番組の内容は、地域のイベント情報の他は、その時々出演者の持ち味を活かし、特定のテーマに限定していない (論文末資料表1)。これまでのゲスト出演者は、日米



写真1 WRFU スタジオ, 2013年12月

から70名をこえた。

番組を開始した当初は、イリノイ大学での日本文化関連の講義などにおいて、コミュニティラジオと Harukana Show について説明をさせてもらった。そこから番組の開始を知り、イリノイ大学の学生たちがスタジオに遊びにきて番組トークに参加してくれた。また、大学のアジア関係の諸機関⁸⁾にも協力を求め、地域でのアジア文化関連イベントなどの関係者と連絡をとり番組出演を依頼した。その後、新たに加わったアーバナ在住の日本人スタッフが、地域在住の日本人や日本関係者やその知り合い、アーバナ・シャンペーンへの訪問者に出演を依頼した。

毎回の番組録音は、トークのみを10～20分の長さに編集し、1～3部に分けて番組サイトの Podcast のページにアップロードしている。番組終了後、音声を少しでも聞きやすく編集し、トークの内容を日本語の文章にまとめ、関係する情報を付記し写真などを添える。日米をつないだトークが、その場所の季節、社会、時代を背景に記録され、アーカイブとして蓄積される。また、毎年、多くの住民が移動し入れ替わる地域において、アーバナ・シャンペーンへの訪問者、滞在者の足跡をメディア空間に残していくことにもなる。

2012年6月中旬に新しいサイトに移行した後は、アクセス数が記録される仕組みとなった。Harukana Show の番組開始の経緯やその内容、そこでのメディア空間の特徴については、西川 (2012, 2013a, b, c) で論じてきた。ここでは、番組サイトの訪問数等の統計から推測されるユーザーの傾向をとらえる。

2012年7月から2013年12月までの18ヶ月間の番組サイトへの訪問数は、3,789件、ユーザー数は1,494、訪問時の平均滞在時間が3分24秒、直帰率 (サイトにアクセスした最初の頁をみてそれ以上すまざ離脱した割合) 51.54%、新規訪問の割合39.01%、ページビュー数10,553、平均訪問ページ数2.79である。訪問者数の月平均は216、国別の訪問数は、日本が74.56%、アメリカが23.64%である⁹⁾。

番組サイトへの毎週のアクセスには、一定の傾向がみられる。その週の Podcast のページが新しくアップされる週末はサイトアクセス数が10前後であるが、ウィークデーは漸減し日々のアクセス数は5以下になり、ゼロとなることも稀にある。また、1日のアクセス数が突発的に20を越え、60に及ぶこともある。これは、番組のゲスト出演者が Twitter や Facebook などで Harukana Show への出演と Podcast のアドレスを告知した場合である。出演者の「友達」にまでは情報が届

いても、「その友達」にまで情報が拡散するといった展開はみせていない。

Harukana Show は、地域における公共の電波を使い毎週のラジオ放送を重ね、番組サイトを更新し、ラジオとインターネットによって定期的に情報を発信しているが、番組サイトへのアクセス数から見る限りは、番組を中心としたリスナーやビジターのネットワークが広がっているわけではない。毎週50程度の訪問数であるが、それでも、Harukana Show の番組サイトを認識し、このサイトに時折、アクセスするユーザーが日米を中心に存在することも確かである。音声を聞くというよりも、それに添えた文章や小見出しを一目する場合が多いと考え、新サイト移行後は、毎回の放送の内容を文章でより詳しく記載している。

ユーザーから番組サイトへの書き込みは少なく、当サイトにおいてユーザーとの双方向的なコミュニケーションが成立しているとはいえないが、毎週更新される Podcast のアーカイブが、長期的に見れば、番組と出演者、ユーザーをつなぐツールとなっている。たとえば、番組を開始した初期の時期に出演し、その後イリノイを離れた人が、新しくなった番組サイトを何かのきっかけで見出し、番組がいまだに続いていることや、イリノイ在住の知人が出演していたことを知り、その後、時々番組サイトをみるようになったというメッセージがEメールで届くこともある。日本に滞在して日本語研修を受けた後に、留学前にラジオ出演した際の音声記録を番組サイトから聞き、語学力の上達を確認し、再び番組に参加するという場合もある。

1-3 ラジオ局スタジオを核としたつながり

コミュニティラジオとインターネットを利用した Harukana Show の情報発信の仕組みと現状をまとめると、次のようになる。①地域にコミュニティラジオ局があり、地元から番組スタッフが毎週金曜日夕方にスタジオへ行きラジオ番組を放送し、半径約 10km 内の住民が自宅やカーラジオでこれを受信する。②トークの録音が編集され放送数時間後に番組のウェブサイトの Podcast のページに掲載され、数は少ないが地域や世界の誰かがサイトにアクセスする。③日米からのゲスト出演者が、番組出演について SNS などを利用して告知し、また検索エンジンなどで Harukana Show のサイトを地域内外のネットユーザーが知る。これら①～③は、番組制作者側からの発信にとどまり、ゲスト出演者と「友達」のあいだには、双方向的なやりとりが行われていても、番組と「出演者の友達」との間に

は、目に見える関係は生じていない。

Harukana Show をとおした人と人との関わりは、ラジオ放送やインターネットをおとした毎週の情報送受信によってではなく、A. 番組準備、B. スタジオでの番組制作、C. 番組サイト内のアーカイブ、をおして生じる。まず、A. 準備段階では、番組スタッフのあいだでメールを用いて、毎週の問題を提案、情報交換し出演者へ依頼し、打ち合わせ、番組構成表を作成する。そして、B. 対面的なコミュニケーションとして番組の核となるのが、アーバナのダウンタウンの真ん中にあるラジオ局スタジオの存在である。放送時間のあいだは、スタジオが、出演者が集う小さなサロンとなる。毎週、誰かがスタジオに集まり、日本とオンラインでつなぎ、日本語や英語での会話が繰り返される。さらに、C. 生放送を編集して音声と文章、写真を番組サイトにアーカイブとして残し公開することによって、誰かが、いつか、その番組を発見し、その声の主である過去の自分や知人に再会し、あるいはアーカイブから「何か」を見だし、そこから番組との関係がつながる場合もある。

ラジオもインターネットも、高速の情報発信・受信手段ではあるが、それが人と人をつなぐツールとなるのは、メディアを使う人たちの「番組制作の営み」や、「人が集う物理的な場所」や、「時間や場所をこえてアクセス可能なメディア空間」などが組み合わさって機能するときである。Harukana Show の場合は、地理的には地球の反対側にある異なる場所に暮らす人々を、メディアをおして声でつなぎ試みであり、それを実現しているが、場所を拠点とした人と人との関係は現在のところ、人が集うサロンとしてのラジオ局スタジオとスタッフと出演者との関係に限られている。

また、2013年末には、アーバナ・シャンペーンで番組ホスト役を務めていた日本人スタッフが引っ越し、ラジオスタジオへ直接に来て番組に参加することができなくなった。1名の機材担当者がこれまでとおり毎週スタジオに入り番組を支え、日本史を専攻するアメリカ人大学院生がスタジオに来て番組を助け、在米日本人スタッフが米国内の転出先から、そして筆者が日本からオンラインで番組の生放送に参加している。世界のどこからでも、インターネットを使いアーバナのスタジオのパソコンと接続して、ラジオ番組をともに制作することはできる。しかし、WRFU での番組づくりの拠点は、人が集うスタジオである。現地での出演依頼、スタジオでのゲストの迎え方など、これまでとは異なる工夫が必要となる。Harukana Show が2

年10ヶ月にわたって続いてきたのは、現地スタッフが出演者を迎え、顔が見えるつながりを大切にしてきたおかげであると改めて痛感している。

それでは WRFU の他の番組やアーバナ・シャンペーンの住民組織は、コミュニティ・メディアを利用するなかで、どのように地域と関わっているのだろうか。次章では、地域の住民が、1つのコミュニティ・メディアの利用にとどまらず、地域の様々な媒体を組み合わせ活動を展開している事例を紹介していく。

2 コミュニティ・メディアの組み合わせ —「私」がメディアをつなぐ

2-1 The Show—複数の地域メディアを使いこなす

「The Show」は、イリノイ大学大学院生の Raymond Morales 氏（図1、以下 Ray と記す）が2005年に始めたラジオ番組であり、2007年からは Urbana Public TV や Illinois University TV から、同名のケーブルテレビ番組を放送している。Ray は、ニューヨーク South Bronx 出身のヒスパニック系アメリカ人である。ラジオ番組を始めた2005年当時は、イリノイ大学大学院で医学博士取得をめざしていた。私が UCIMC の会員となった2010年には、Ray が WRFU のマネージャーをつとめ、毎月の集会をとりまとめていた。また、イリノイ大学のキャンパスで開催される移民や人権問題などに関する集会や、UCIMC や大学内で開催される詩を読むイベントなどでも、Ray をよく見かけた。

The Show が扱うのは、「都市部ラティーノ的な視点から伝える時事問題やアート」であり（The Show の公式サイトより）、大学内外で開催される音楽ライブやダンス、詩の朗読のイベント中継、また、地域在住の、あるいは他地域からアーバナ・シャンペーンへ



図1 The Show のHP より Raymond Morales

講演やイベントにやってきた研究者、アーティスト、活動家へのインタビューやディベートを番組で紹介している¹⁰⁾。マスメディアの報道を批判的に論じ、地域の話題、たとえば警察官による人種差別的行為、イリノイ大学のマスコットキャラクターにみるネイティブ・アメリカンにたいする差別といったテーマを若者が集まって議論する場合もある。全体をとおして人種差別にたいする異議申し立ての姿勢がみられる。

Ray は地域のメディアを利用するようになった経緯を、The Show の公式サイトに次のように記している。

「ラジオ番組として The Show が始まったのは、そもそもは、2005年8月のイリノイ大学の Quad Day（毎年8月にイリノイ大学キャンパスで開催されるイベント。大学だけでなく、地域の組織、団体が多数集まり、それぞれのブースを出して、各活動を宣伝し、加入者を募る）での偶然の出会いからだ。そこで、新しいコミュニティラジオ局ができるから参加しないかと誘われた。その後、初めてラジオ・フリー・アーバナの活動を見学したときには、まだタワー（電波塔）も完成していなかった。それから何回か、WRFU の集会に行った。本当に開局するのか危ぶまれたが、2005年11月13日に放送が開始された。The Show はその週の金曜日、11月18日から始まった。」

その後、1年半がすぎ、Ray は、動画制作にも関わり始める。

「初めて TV 用映像を作ったのは2007年6月、WRFU のスタジオで何人かのゲストを迎えたトークを撮影したが、映像のクオリティは、出演者の表情が分からないくらいひどかった。予算もほとんどなかった。それから TV 放送に向けて、編集から照明まで映像制作を少しずつ学んでいった。最初は、ケーブルテレビチャンネル6の Urbana Public TV で放送していたけれど、そのうち、ケーブルテレビチャンネル7の University of Illinois TV でも放送できることがわかった。金曜日の夜はラジオ放送、月曜日と水曜日の夜はケーブルテレビから映像を届けている。」

The Show の名前で、コミュニティラジオと2つのケーブルテレビ局から放送された番組を、Ray は自分が運営する番組ウェブサイトにとりまとめ、You Tube（インターネット上の動画共有サービス）を利用してアップロードし、番組映像をアーカイブとして公開している。番組サイトの Video のセクションには、2012年8月から2013年7月までの100エピソードのうち12エピソード（動画約30分から1時間）の要約が掲載されている。You Tube には Raymond Morales の名前で、

2007年から2013年まで、219の The Show の映像がアップロードされ、各映像へのアクセス数は、2013年12月末現在で、20数回から15000回を越すものもある。

2-2 The Show の制作現場

The Show には制作チームはなく、その時々に必要な作業にたいして、Ray が友人たちにサポートを依頼する。毎週1本のラジオ番組と2本のテレビ用映像を、いったいどのように制作しているのだろうか。大きく2つのパターンがある。1つは、地域で開催されたイベントを Ray が取材し撮影する。大学街であるアーバナ・シャンペンでは、年間を通して多種多様なイベント、集会、ワークショップ、公開レクチャーが行われている。なかには、限られた関係者以外には知られていない催しもある。Ray は、自分が関心をもったイベントを選んで番組で紹介していく。もう1つは、自宅スタジオで、ゲストとのトークや Ray 自身の語りを撮影する。地域外からイリノイ大学へやってきたアーティストや研究者に、The Show のためのインタビューを申し込む場合もある。取材へ赴く場合でも、自宅スタジオでの収録の場合も、照明、音響、撮影、編集などの作業を一人でやるのが難しい時には、そのイベントの関係者や知人に撮影補助などを依頼している。

2012年3月に渡米した際に、アーバナにある Ray の自宅スタジオと The Show の番組制作を見学させてもらった。自宅アパートのリビング一角に、デスクが置かれ、後ろの壁は、濃い茶色の布が張られていた。Ray は、ダーク・グレーのジャケットの下には、オーシャンブルーのYシャツを着てアイボリー色のネクタイを締め、机の上に立てかけた iPad のレザーカバーの茶色と同色の皮のアクセサリを服につけている。テレビ画面上の「見せ方」を意識したおしゃれな配色である。ただし、映像画面に入らない下半身には、部屋着のジャージをはいていた。

椅子に座った Ray の前には、三脚に置かれたカメラが2台、照明は天井と正面と斜め横から3カ所、マイクは天井から吊るしている。パソコンがカメラ後方に置かれ、Ray は撮影映像をこの画面から確認することができる(写真2)。

リビングルームのカメラ2台で撮影された映像は別室のパソコンに送られる。この部屋のL字型に組まれた机の上には、パソコンのスクリーンが3台あり、このうち2台が、編集作業に使われていた(写真3)。Ray からの撮影と編集作業の依頼を受けた友人が、2



写真2 Rayの自宅スタジオ(1), 2012年3月



写真3 Rayの自宅スタジオ(2), 2012年3月

台のカメラから送られた2つの画面(話者の上半身が映る画面と表情がクローズアップされた画面)を切り替えながら、話の内容にそって事前に指示された文字と写真を挿入し、テレビ用の映像を作る。この映像が、Ray の前方にあるパソコン画面にも映り、Ray は、これを見ながら一人で話していた。

この日は、夜10時からの WRFU のラジオ番組30分を収録し、WRFU へ音声データが送信された。ラジオ番組の音声収録とともにビデオカメラでも撮影しているが、Ray は1回目の動画収録には納得せず、その後2回、同じ内容のトークを繰り返し、TV用の収録を終えた時には日付が変わっていた。主な話題は、1ヶ月前の2012年2月にフロリダ州で起こった黒人少年 Trayvon Martin 射殺事件とその報道についてである。30分の動画は Ray が編集して2分ほどの短いクリップをケーブル TV からの番組放送に先立って YouTube にアップロードしている¹¹⁾。

The Show の動画は、パブリック TV への配信を始めた最初の数年は、自宅スタジオでのローカルなアーティストたちによる演奏や知人たちが集まったディスカッションを、固定した1台のビデオカメラで撮影し未編集の映像を番組に使っていることが多かった。数

年後には、画質も格段と良くなり、構成、編集された映像となっている。個人で購入できるカメラ等の機材の機能が改善され、Ray 自身も撮影、照明、音響、編集、そしてトークや番組構成のスキルを習得していったことがわかる。

Ray は、番組制作をとおして、地域内外のさまざまな人々と出会い、彼自身のネットワークを拡大していくが、地域づくりやコミュニティのつながりを深めることを目的にしているわけではない。「The Show」は、Ray 個人にとっての情報発信、表現であり、発信手段がコミュニティラジオやパブリック TV といった公的な媒体であっても、自分の発想、意図を押し出している。2013年春には、Ray は大学での課程をほぼ終え、9月にはアーバナ・シャンペーンから転出し、The Show はいったん休止している。しかし、番組が終わったのではなく、Ray のキャリアとともに場所を移し、そこから、また次なる The Show が始まるのではないかと思われる¹²⁾。

2-3 地域メディアをつなぐ

WRFU の番組担当者の中には、最初はラジオ番組制作に携わりコミュニティ・メディアへの関心を深め、次に UPTV でのテレビ番組制作に関わるというケースが珍しくない。WRFU と UPTV のスタジオは、徒歩 8 分ほどの近距離にあり往来もしやすい。Neil Parthun 氏（以下 Neil と記す）が担当する「Not Another Sports Show（単なるスポーツ番組ではない）」は、WRFU のラジオ番組（土曜日午後 2 時～3 時）であり、また、同名のテレビ番組として UPTV（水曜日午後 6 時～7 時）からも放送されている。ラジオ番組のウェブサイトのサブタイトルに「a radical look at sports—left sports radio（過激なスポーツ観戦、左翼系スポーツラジオ）」と記されているように、一般的なスポーツ番組とは異なり、Neil が「スポーツにみる政治」について辛口かつ軽快に語るトークショーである。

Neil は、イリノイ州、Manhattan 出身、2001年にイリノイ大学に在籍するためにアーバナ・シャンペーンに転入した。現在は地域の中学校で歴史を教えている¹³⁾。2009年から WRFU で番組を担当し、2010年12月以降は、ラジオ番組の録音を同番組サイトにアップロードしている。

2012年には、UPTV のボランティアプロデューサーやスタッフと協働してテレビ版「Not Another Sports Show」を開始した。土曜日の WRFU スタジオからの

ラジオ番組の生放送をビデオカメラで撮影し、その動画を UPTV から水曜日の夕方に放送するというかたちである。この映像の一部は、UPTV 番組として YouTube でもみることができる。2013年12月現在では、Neil の番組が33アップロードされている。Neil は自身がホスト役となる番組の他に、The United Wrestling Show というプロレスリングに関するポッドキャストでは、メインスピーカーの相手役も毎週つとめている。

Neil のコミュニティ・メディア活動は、ラジオ、テレビ放送だけでなく、UCIMC のプロジェクトの 1 つである *Public i* の編集にも関わっている。*Public i* は非営利新聞であり、年に11回発行され、アーバナ・シャンペーンにある飲食店や文化施設などに無料で配布されている。記事の内容は、地域や世界のさまざまなレベルの政治、人権、環境、経済、労働、メディア、アート、コミュニティフォーラムなどについてである。ボランティアの市民ジャーナリストたちが記事を書き編集している。住民がジャーナリストであり、同時に批判的な読者であることをめざしている。

2001年7月からの記事は毎月、*Public i* のウェブサイトアーカイブとして掲載されており、読者が各記事へのコメントを書き込むことができる。*Public i* のメンバーのあいだでは、ほぼ毎日、情報交換や投稿記事へのコメントなどがメールで議論されている。また、毎週水曜日午後 7 時から、UCIMC 建物内で公開の集会を開いている。*Public i* のメンバーでなくても、誰でも参加することができ、筆者も見学に行ったことがある。国内外の政治や人権、平和、環境などの分野に関心をもつ活動家たちの緊張感を漂わせた集まりであった。Neil は、自身の写真と名前とともに、スポーツと政治に関する記事をしばしば投稿している¹⁴⁾。

Ray や Neil は、地域の一個人が、多様な媒体を使いながら公的に発言を続け、顔が見えるキャラクターとしてコミュニティ・メディアに定期的に登場している。アメリカのパブリックアクセス制度のもとでの「編集権」については、津田（2011：74）が次のように説明している。「誰でも自分のコミュニティのケーブルテレビを使って、自分の作品を無料で放送できる。テレビ局側の監督や検閲を受けることなく、『編集権』を確保して自由に表現できる。番組の内容は、多種多様だが、日頃から発言・発信の機会が少ないマイノリティや、コミュニティの人々にとっては重要なメディア」である。

パブリックアクセス制度が、現在のアメリカ各地で

同じように活用されているわけではないが¹⁵⁾、アーバナ・シャンペーンの場合は、コミュニティ・メディアとは、その場所に生活している「個人」の表現、発言を尊重し公共に伝える手段を確保することが基本となっており、Ray たちのような独自のメディア表現、活動の展開を可能にしている。少なくとも UPTV や WRFU においては、どれほど視聴者が少なくても、番組を担当し放送を続けることができる¹⁶⁾。

また、低出力ラジオやパブリック TV、あるいは市民新聞も、各運営主体、方向性、視聴者、読者層は様々ではない。それぞれが独立した媒体であるが、異なるコミュニティ・メディアのあいだを、それらを情報発信手段として利用する住民が自由に行き来することで、地域のメディアとしてのつながりを生みだしている。

パブリックアクセス制度や多様なメディアを利用して第三者へ発信することができたとしても、その情報を必要とする人々のもとへ届けることは容易ではない。また、そこで情報を受け取った人々が動き始めるには、それをサポートする仕掛けが必要となる。次の章では、移民問題を扱う NPO の組織が、地域のメディアを利用しながら、どのように人と人をつなぎ運動を展開しているのかをみてゆく。

3 運動としての地域メディアの活用

3-1 Champaign-Urbana Immigration Forum—情報交換から協働へ

Champaign Urbana Immigration Forum (移民フォーラムと記す) は、Champaign County 内の移民問題を扱う複数の団体による連絡協議会である。2011年に、それまで個別に活動していた団体や個人が、情報を交換し、他地域、全国の運動と連携していくために結成された。大学教職員、学生団体、高校教職員、教会関係者、労働組合、住民組織など、さまざまな立場の人々が関わっているが、厳密なメンバーシップや会員としての義務があるというよりは、個々人の意志や事情にあわせて自由に参加できるボランティアの集まりとして始まった。

しかし、後述する DACA (Deferred Action for Childhood Arrival) プログラムや Comprehensive Immigration Reform (移民法改正案) をめぐってなど、地域において緊急に活動を展開すべき課題が続き、「Champaign-Urbana Immigration Forum」という名前のもとで協働して活動する機会が増えた。2013年末現在、移

民フォーラムの活動は、大きく3つの方向に展開している。①地域の移民問題を扱う異なる団体間の情報交換と発信、②移民フォーラムとしての地域での広報活動、イベント開催、③隣接地域、全国の関係諸団体、運動との連携、である。

①の関係諸団体間の連絡、協議については、毎月第1火曜日午後5時から運営委員が集まり関係諸団体からの報告、議題を整理し、これにもとづいて第2火曜日に公開集会を開いている。イリノイ大学 YMCA の建物内の会議室で大きなテーブルを囲み、各団体の活動報告と共通した課題への取り組みなどを話し合う。移民フォーラム関係者のあいだでは、集会以外では、個別にはEメール、SNSも活用され、そこに集まる情報は、移民フォーラムのウェブサイトにもまとめて公開している。たとえば、サイトのカレンダーには、移民フォーラムが主催する会議やイベントの他に、関連諸団体のイベント情報なども掲載されているので、移民問題関係の地域の諸活動をまとめて知るうえで便利である。

②移民フォーラムが主催するイベントは、組織が発足した当時よりも増えた。2012年には、オバマ大統領が6月15日に DACA (16歳未満で親とともにアメリカに移住し、継続して5年以上居住した30歳以下の不法移民について、一定の条件¹⁷⁾を満たせば強制送還の手続きを2年間免除する措置)を発表した。2ヶ月後の8月15日に申請受付が開始された直後から、移民フォーラムは、DACA に関するワークショップを開催し、申請希望者には書類作成などの手続きを支援する取り組みを展開してきた(西川 2013a)。

また、2013年には、移民法改正案にどう取り組むかが、移民フォーラムにおいても大きな課題となっていた。この法案は、1100万人にもものぼるといわれているアメリカ国内の不法移民に市民権獲得の道を開き、IT技術などの専門家のビザ発給枠を倍増し、国境警備をさらに厳しく行う、などの内容が盛り込まれている。2013年6月27日に上院で可決されたが、共和党が多数を占める下院では、この法案が通過する見通しは難しいと言われている(西山 2013)。移民フォーラムでは、移民法改正案を支持する集会を開催し、法案が上院において通過した後は、アーバナ・シャンペーンを含む選挙区選出の Rodney Davis 下院議員(共和党)にたいして、移民法改正を求める署名を集める活動をすすめている。この他、不法滞在者が運転免許証を得るための申請手続きに関するワークショップなども行っている。



写真4 Public i, May 2013 表紙

③については、DACA や移民法改正案をめぐる運動は、隣接する地域やシカゴの諸団体と情報を交換しながら行われている。移民フォーラムの月例集会には、シカゴを活動拠点とする ICIRR (Illinois Coalition for Immigrant and Refugee Rights) のメンバーが参加し、イリノイ州や全国の運動と連動した動きを伝える。DACA 申請など、迅速に対応する必要がある案件では、移民フォーラム関係者が隣接する地域で移民問題関連団体が主催する DACA 説明会（英語とスペイン語）を視察し、ワークショップの進め方など実践的な方法を学んでいる（西川 2013a：142-143）。2013年4月10日の National Action Day for Immigration では、全国諸都市で行われたイベントと連動して、シャンペーンでは、移民フォーラムが中心に集会を企画し、雨のなか200人が集まって街中を歩き、移民の人権保護や移民法改正案支持などを訴えた（Esbenshade, May 2013, 写真4）。

2013年の移民フォーラムの活動は、上述したように①「関係者間の情報交換」を基本としながら、②「移民フォーラム主催のイベント、活動」がより大きな比重をしめている。これにともない、地域メディアの使い方も変化した。発足当時は、関係団体、個人間のEメールやSNSを利用した連絡、イベント開催の告知、移民フォーラムのサイトからの情報発信が中心であった。その後、DACA や「移民法改正案」をめぐる活動を展開するなかで、移民フォーラムの地域への情報発信の重要性が認識され、移民フォーラムの組織には、代表、副代表、会計、セクレタリーの他に、「メディア担当」がおかれ、2013年春からは、パブリック TV で移民フォーラムの番組を開始し、イリノイ大学の新聞やテレビ局、あるいは地域の商業的新聞やテレビ局

へ、「移民フォーラム」が主催するイベントなどについての情報を積極的に伝えるようになった。

3-2 移民フォーラムの活動レポート

2013年8月の調査では、地域メディアの利用について注目しながら移民フォーラムの活動をおった。8月6日運営委員会、13日定例会、19日 Urbana Public TV 収録、25日 Quad Day、そして関連する活動として8月5日、12日、19日に WRFU の移民関連ラジオ番組の収録を見学した。

2013年8月13日（火）の移民フォーラム月例集会には、10名ほどが出席していた。移民法改正案を支持する署名カードを集め、Rodney Davis 下院議員へ届ける活動について話し合われていた。参加者は署名カードを何10枚か持ち帰り、それぞれが所属する団体から配布、署名を集める。こうした移民フォーラムの活動については、毎週月曜夜に放送される WRFU のラジオ番組「Triple R」でも伝えられる。番組担当者は、2013年現在は移民フォーラム代表でもあるが、この番組を長年担当し、メキシコやチリ出身の学生や地域住民をゲストに迎えて、主にヒスパニック系の移民問題、DACA や不法滞在者の運転免許取得、移民法改正案などの話題を番組に取り上げている（西川 2013a）。

コミュニティラジオの他に、移民フォーラムのメディア担当 Ricardo Diaz 氏（イリノイ大学職員、以下 Ricardo と記す）は、2013年春から、Urbana Public TV で「Champaign Urbana Immigration Forum TV」を開始した。最初は、同局の別の番組にゲスト出演して、パブリック TV がコミュニティの問題を発信する有効な手段だと知り、移民フォーラムの番組を放送しようと考えようになった¹⁸⁾。移民法改正案をめぐる議論が高まり、地域でもこの法案を支持する運動が展開し始めた頃だ。

私が Ricardo と初めて会ったのは、移民フォーラムが発足する以前である。2010年10月に WRFU の集会に参加したとき、当時ラジオ番組を担当していた Ricardo が、「僕だって3年前は、何も分からないままラジオ番組を始めたよ」と話しかけてくれた。WRFU や UCIMC の集会を見学しても、グループでの議論をほとんど理解できなかったが、Ricardo が話す英語だけは、私にも聞き取りやすかった。おかげで、その後も、WRFU の集会に通うことができた。Ricardo が、メキシコ出身でスペイン語を母語とすることを、後から知った。私が日本語のラジオ番組を始める前にも、彼が担当するスペイン語のラジオ番組を



写真5 Urbana Public TV (1), 2013年8月

見学しアドバイスを受けた。その Ricardo が、今度は、UPTV でケーブルテレビ番組を制作していると知り、見学させてほしいと伝えていた。

8月19日、「今から UPTV で Immigration Forum TV の収録だけど、見学に来ていいよ」と Ricardo から連絡を受けた。UPTV のスタジオは、City of Urbana の市庁舎内の会議室の隣にある。市議会やさまざまな公聴会の様子も、このスタジオの機材を用いて放送されている。Urbana Public TV に到着すると、Immigration Forum TV の番組撮影はすでに始まっていたが、スタジオのガラス窓の外から合図すると、スタッフが「Ricardo の友達? いいよ、入って」とドアをあけ、椅子を勧めてくれた。細長いスタジオは、出演者が3人並んで椅子に座るだけの幅しかなく、その後ろには U-C Immigration Forum という名前を記した幕を張っている。細長の部屋のもう一方の端に、カメラ2台と機材、パソコンが置かれ、スタッフが一人で撮影作業を行っていた(写真5)。

「C-U Immigration Forum TV」のホストは Ricardo である。この日のゲストは、「移民フォーラム」副代表 Claire Cszoke, 70歳代の小柄な白人女性であり、移民支援、人権保護の活動を、教会をとおして行っている。毎週土曜日の午前中、Urbana のダウンタウンの屋外駐車場で開かれているファーマーズ・マーケットでも移民フォーラムがブースを出して、移民法改正案への理解と支援の署名を求めている、と話していた(写真6)。収録した番組は、短縮版のクリップと、30分の番組に編集して、UPTV から放送され、You Tube にもアップロードされる。

この日の撮影担当者は、「移民フォーラム」のメンバーではなく、ボランティアで UPTV の活動に携わ



写真6 Urbana Public TV (2), 2013年8月



写真7 Quad Day, 2013年8月

り、住民による番組制作の撮影、編集をサポートしている。「本当に誰でも番組をもつことができるのですか、ただで?」と尋ねると、「もちろん、そうですよ」と答えが返ってきた。「C-U Immigration Forum TV」の収録が終わると、すぐに別の住民がスタジオに入り次の番組撮影が始まった。

「移民フォーラム」は、コミュニティラジオ(WRFU)、パブリック TV (UPTV)、大学放送局(WILL)、大学新聞(*The Daily Illini*)、市民新聞(*Public i*)の他に、商業的な報道機関(*The News Gazette*)や地方テレビ局(WICD, WCIA)などとコンタクトをとり、取材を受けるなどして、広報活動を積極的に行っている。また、UPTV の番組のなかで Claire が語っていたように、ファーマーズ・マーケットなど人が多く集まる場所に出向き、移民問題について住民と直接話す機会を設けている。

8月25日にイリノイ大学キャンパスで開催された Quad Day にも、大学や地域の600以上の団体の1つとして、「移民フォーラム」はブースを出していた(写真7)。ICIRR が作成したアメリカの移民問題に関する資料と、Rodney Davis 下院議員への署名カードを用意し、行き交う人々に声をかけていた。イリノイ

大学の新生を中心とした若い学生たちが立ち止まり、移民フォーラム関係者にたいして時には質問を投げかけ話し込む姿も見られた。

3-3 人を動かすメディア戦略

地域メディアを複数組み合わせ、情報を発信していく点では、移民フォーラムは、2章で紹介したRayやNeilといった個人の活動と共通している。しかし、移民フォーラムの場合は、より多くの人々が移民に関する問題に関心をもち、さらには、移民フォーラムの取り組みに参加するなど、動き始めることをめざしている。移民フォーラムの活動と地域や住民との関わり方は大きくは3つある。

第1には、移民に関する問題を扱う地域の団体関係者のあいだでの「顔が見える関係」作りである。EメールやSNSを使えば、関係者のあいだでの情報交換はできる。しかし、移民フォーラムは、毎月イリノイ大学YMCAで集会を開き、そこへ人が足を運び、顔を合わせ、直接に話し合うことにこだわる。この集会には、移民フォーラムのメンバー以外の見学者をよくみかける。顔が見える関係を外部へと開いていくことによって、移民問題を異なる立場から扱う諸団体や個人が、状況に応じて連携しやすくしておく。

第2には、住民のあいだでの移民問題への関心を高め、「理解者、支援者を育成」することである。複数のコミュニティ・メディアや地方紙、放送局から積極的に地域の情報を配信するだけでなく、Quad Dayなど大学キャンパスや地域のファーマーズ・マーケットなどで、学生や住民と自由なかたちで対話できる場を設けている。移民問題に関心をもちた人々が、アクションを起こしやすいように誰でもが参加できるイベントを随時開き、たとえば、DACA支援ボランティア講座や公開集会などは、イリノイ大学やパークランド・カレッジのキャンパスなど、学生が集まりやすい場所や街の中心部で開いている。こうした活動のなかで、移民フォーラムは、Rodney Davis下院議員へ宛てた「移民法改正案」支持を求める署名を1500以上集めることができた。

第3には、移民フォーラムが扱う「移民問題の当事者との実践的な関わり」である。DACAプログラムや運転免許取得など、公的な手続きが必要な問題や制度の変更の詳細は、とくに非合法滞在者には届きにくい。また、マスメディアは、より多くの人に関心をもち情報をより多く伝えるが、マイノリティの問題を詳細に扱うことは難しい。移民フォーラムは、地域メディ



図2 C-U Immigration Forum Tシャツ (エンシ色)

アやフライヤー、ポスターなどを使って、あるいは、教会や高校やコミュニティ組織など、地域住民間のネットワークをとおして、必要とする人に情報が届くように試みる。

しかし、DACAプログラムや運転免許取得手続きも、その人が抱える条件によって、申請要件、証明書類等が異なり、規程を理解し書類を正しく作成することは容易ではない。概括的な情報提供だけでなく、それぞれの事情にたいして個別に対応するために、移民フォーラムは、専門家や多数のボランティアをまじえた相談会を、教会、高校、図書館、コミュニティ・センターなど、住民にとって身近な場所を選んで開催している。

移民フォーラムへの参加団体や個人が協働して活動する場合は、「Champaign-Urbana Immigration Forum」の名前を掲げる必要があり、また移民フォーラムが開催するイベントにおいては、各関係者が所属する元の団体とは別に、そのイベントの主催者である移民フォーラムのメンバーとして自覚が求められる場合もある。より多くの人々に参加を求めていくためにも、「C-U Immigration Forum」という名前が実体として人々に認知されなければならない。「C-U Immigration Forum TV」が開始され、地方新聞や放送局からも取材を受け、C-U Immigration Forumのロゴが入ったTシャツを作り(図2)、フライヤーを配布し、地域のさまざまなメディアをとおして移民フォーラムの存在が次第に視覚化され地域に少しずつ浸透していく¹⁹⁾。こうしたプロセスは、地域のなかで運動を生み出し展開していくうえで重要である。

ラジオもテレビも紙媒体も情報発信の手段ではあるが、しかし、発信者と受信者のあいだでの双方向的な交流のツールではない。そこで、移民フォーラムの場合は、異なるメディアを使って情報発信するとともに、「関係者間の顔が見える関係と連携」、「地域における問題共有、支援者育成」、「当事者との関わりと各事情

への対応」をしていくために、人が集い顔を合わせるイベント（定例集会、講演会、ワークショップ）を、住民が足を運びやすい場所を選んで企画、実施している。情報発信手段としての即時的な効果がどれほどあるかは確かではないが、地域の複数のメディアを利用し、かつそれをより広域や全国レベルの情報や活動と連動することができる体制をつくり、関心をもった地域の人々が行動しやすいルートをつくっておくことが、移民フォーラムのメディア利用の戦略なのではないかと思う。

4 地域に根ざした小さなメディアの可能性 とメディア表現者たち

4-1 小さなメディアを使う—手探りで学ぶ

この論文では、アメリカ、イリノイ州、アーバナ・シャンペーンでの、筆者のメディア実践とフィールドワークをとおして、メディア表現者の活動に着目しながら、異なるタイプの地域メディア利用の事例を紹介してきた。そこでの情報発信媒体は、低出力ラジオ、ケーブルテレビ、地方新聞、フリーペーパー、ウェブサイトや、地域で開催される諸イベントなどさまざまであるが、いずれの事例も、それぞれの活動をすすめる過程で、関係者が地域のメディアを新たに見つけ出し、複数の媒体を組み合わせて活動を展開している。

1章で紹介した Harukana Show は、地域において聴取者が極めて少ない言語である日本語を用い、低出力ラジオ放送とインターネットを組み合わせ2011年に番組を始めた。ラジオからは音声しか届かないので、番組フライヤーにはスタッフのイラストを描き番組をイメージしやすくし（西川 2012：60, 2013a：136 図参照）、番組サイトには文章や写真も掲載している。また、2012年には、番組放送の様子をスタジオで撮影し短い動画にまとめ YouTube に公開している²⁰⁾。Harukana Show は、英語圏での日本語放送であるため、番組の取り組み方やその内容は、同じラジオ局の関係者のあいだでさえ認識されにくい。そこで、2013年には、『Grassroots Media Zine』創刊号（図3）を発行し、“A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United States”（多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから）というタイトルで、番組開始の経緯やその後の展開を、英語で説明している²¹⁾。アメリカのレターサイズを半分折った18頁の小冊子であり、番組サイトにもPDF版を掲載している。

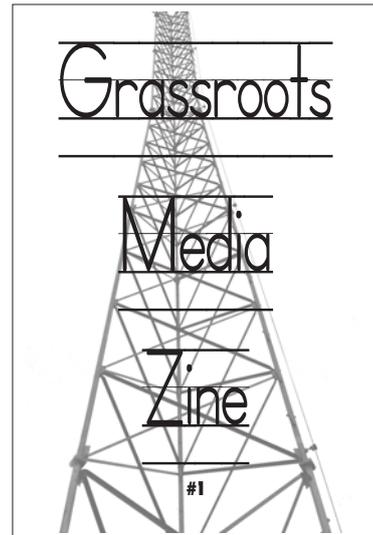


図3 『Grassroots Media Zine』No.1 表紙

「メディア実践」といっても、どのようなメディアを利用するかによって表現や発信の方法は一様ではない。1つのメディア活動に携わることで多様な人々の関わり、日々の暮らしや情報への気づきが増え、他のメディアへの関心をもちやすくなる。あるメディア実践に触発され次へと展開していく経験は、2章で紹介した「The Show」の Ray や「Not Another Sports Show」の Neil、3章でとりあげた「移民フォーラム」のメディア担当者、Ricardo にも共通している。3人とも、ラジオ番組を担当した数年後には、ケーブルテレビで番組制作を手がけ、またそれぞれの番組や活動のウェブサイトも運営している。Ray はまた、「言葉とアート」をめぐる活動に関心を持ち、詩を読むパフォーマンスの活動プロジェクトを立ち上げ、イベントを企画し、映像作品を制作している。スポーツ愛好家の Neil は、自分の番組以外にもオンライン上のプロレスリングに関するラジオ番組にも参加し、また、市民ジャーナリストが編集している *Public i* にも関わっていた。

「移民フォーラム」のメディア担当者 Ricardo は、WRFU のスペイン語のラジオ番組に携わり、その後、ケーブルテレビで移民フォーラムの番組を担当し、地方新聞や大学新聞、*Public i* などの紙面でも積極的に発言している。移民フォーラムは、自分たちの活動を、コミュニティラジオ、ケーブルテレビ、紙媒体、ウェブサイト、ソーシャル・ネットワーク・サービスなどを組み合わせ、さまざまな方向から宣伝し、移民フォーラムのロゴ入りTシャツ、幕などを作り、デモやイベントに参加する際にも、組織の名前を印象づけ運動の一体感を演出するなどの工夫もこらしている。

こうした活動には、「お手本」があるわけではない。

個々人の好奇心や趣向、活動の意図や目的、表現や発信への意欲や意志と、その時々を利用できる機材やメディアの状況に応じて、それぞれのペースで活動を続けている。小さなメディアは、それを使う人々の身体感覚を失わずに、ある程度、自由な発想のもとで、手探りで試行を重ね、経験から学ぶことができる。

4-2 地域に根ざしたメディアの特質

ある場所、地域、国のなかでの、あらゆるレベルのメディアをめぐる環境の全体をとらえることは難しいが、そこに生きる人々は、暮らしのなかでのさまざまな機会をえて、身近なメディアを見だし使い始め、組み合わせしていく。この論文で扱った地域の小さなメディアには、人と人、人と情報と地域をつなぐコミュニケーション・ツールとして、次のような特質があるのではないか。

第1に、それを使う人々が互いに接触しやすく、対面的に情報交換をして自分たちの経験やそこでえた知見、スキルを共有しやすいことである。友人との個人的なつながりではなく、より開かれた関係のなかで、情報とスキルをシェアする感覚とやりとりが、小さなメディアのネットワーク作りを支えている。Urbana-Champaign Independent Media Center も WRFU も Urbana Public TV も、さまざまな経験とスキルをもった多くのボランティアが、そこにやって来て、できる範囲の労力と時間を提供している。Public i も、ボランティアの市民ジャーナリストたちが、日々の暮らしのなかでメールを交し集会で議論し、そのプロセスも発信しながら、最終的な新聞のかたちを作っている。

第2に、地域に根ざしたメディアはまた、情報発信という「営み」に関わる人々や、情報やメッセージを受け取る人々が、身近な「場所」に集まりやすく、メディアによる動員と交流を短時間に起こしやすい。必要な人にその情報を伝える営みは、地域の事情を熟知したメディアであっても容易ではなく、情報を受け取った人が行動を起こすためには、「移民フォーラム」の活動をとおしてみてもきたような、さらなる仕掛けや工夫も必要である。

第3に、地域メディアの運営主体が個人や非営利団体である場合は、地域内外の他の小さなメディアと連携して展開していくことが可能である。この論文で扱ったメディアは、ラジオ放送もケーブルテレビも受信範囲が特定の地域に限定され、紙媒体も発行部数や流通経路は限られ、発信媒体としての影響力は大きいとはいえない。また、1つ1つのメディアは、目的や方向

性が異なり連携が難しい場合もある。それでも、各媒体のあいだをさまざまな人と情報が行き交い、受信者がまたそれぞれに発信し、戦略的に、あるいは意図せず、無数の小さな起点がつながり、より広いネットワークを生み出しうる。

地域に根ざした小さなメディアには、以上のような特徴と展開の可能性があるが、それを使いつなぐのは住民であり、そこにどのようなメディア実践者、表現者が存在し地域と関わっているかによって、地域のメディアをめぐる状況は変わっていく。

4-3 多様な「あいだ」をつなぐメディア表現者たち

アーバナ・シャンペーンは、学生、教職員を含む大学関係者が多く住む地域である。市民の権利として、住民が主体となる公共のメディアの確保やメディア表現にたいする意識は高く、さまざまな市民運動も行われている。地域には、NPOのコミュニティ・メディア&アート・センター、複数のコミュニティラジオ局、パブリックTVや大学が運営するラジオ・テレビ局もある。市民ジャーナリストが新聞を発行し、多種多様なアート活動も盛んである。

その一方で、大学関係者は、学生も教職員も、卒業や就職などによって異動があり、メディアやアート活動の諸プロジェクトの関係者の入れ替わりも頻繁に起きる。そこで計画の変更を余儀なくされ、活動の継続が難しくなる場合もある。どれほど地域のメディアが発達しても、どのような組織、団体、プロジェクトにおいても、変わりゆく地域の状況を見すえて自らが媒体となり人と人をつなぐ人々が存在することによって、地域のメディアは継続的に機能していく。

2013年9月6日のHarukana Showに出演したイリノイ大学Global Arts Performance Initiativesのディレクター、Jason Finkelman氏（以下Jasonと記す）は、アーバナ・シャンペーンという地域の状況と人と場所と時間をつなぐ営みの重要性について番組のなかで語っている²³⁾。Jasonは、イリノイ大学の諸機関²³⁾が主催するイベントの企画、運営に携わり、特にさまざまな背景をもった世界の音楽・アートを融合させた活動をしているグループを、大学や地域コミュニティに紹介しその橋渡しをしている。番組サイトには、Jasonの英語によるトークを、Harukana Showの現地スタッフの小牧龍太氏が翻訳し次のように要約している。

「イリノイ大学や地域コミュニティには多様なバックグラウンドを持った学生・住民がいて、音楽活動ひとつをとっても、さまざまな国・地域発のものが演奏

されています。しかし、せっかくたくさん、多様なイベントがあっても、大学でおこなわれている他の活動や催しに埋もれてオーディエンスが集まらなかったり、演奏グループや主催者が広く宣伝をしないので存在に気がついてもらえなかったり、また、メンバーも学生や教員で構成されているので、卒業や異動でグループが自然消滅してしまったりと、“豊かさ”をキャンパスや地域コミュニティの人々に知ってもらうには、まだまだ努力が必要です。パフォーマンスをする人とオーディエンスのあいだ、キャンパス内の異なるユニットのあいだ、学生グループとコミュニティの人々のあいだ、いろいろな音楽を持って次々にやってきては去っていく人たちのあいだ、そんないくつものあいだをつなぐ場を提供することが目標です。」(Harukana Show Podcast No. 128)

Jason 自身も、打楽器のパフォーマーであり、また大学内のイベントにとどまらず、UCIMC 内や地域の野外コンサートなどの企画運営に携わることもある²⁴⁾。また、シャンペーンにあるコミュニティラジオ WEFT90.1FM において2000年から、ワールドミュージックの音楽番組を毎週担当している²⁵⁾。

アーバナ・シャンペーンでのメディア実践やフィールドワークをとおして見えてきたのは、Jason の話にあるような、多様なメディアを駆使して、自らが媒体となって、地域におけるさまざまな「あいだ」をつなぐ人々の存在である。時には仕事をとおして、時には特定の団体のメンバーとして、学生として、あるいは無名の有志として、地域の多様な活動に関わり、その地域がおかれた状況やその変容を受けとめながら、さまざまな人との関係と経験と知恵を蓄積し、次の場面へとつないでいく。

メディアが人と人をつなぐのではなく、人が創造的にメディアを使い、人と場所と情報をつなぎ、地域での動きをつくりだしていく。私自身も、そうしたメディア表現者たちに触発されながら、メディア実践を含むフィールドワークをとおして、ある場所における人と人との関わり方やその変容、時間や場所をこえた草の根運動の動きをこれからも見ていきたい。

謝辞

西川のメディア実践は、甲南大学文学部社会学科教授森田三郎代表、科研基盤研究(C)「文化学習における映像と音(声)の可能性:大学教育現場への適用を前提として」(平成16年度～平成17年度)、基盤研究(C)「文化学習における映像と音(声)の利用法:大

学と社会をつなぐメディア実践」(平成18年度～平成19年度)における共同研究や、森田先生が携われてきた「NPO 法人ひがしなだコミュニティメディア」の設立や MEDIA ROCCO の定期配信放送などの活動から刺激を受けた。実践をとおして社会と関わる姿勢を森田先生から学ぶことができたことに深く感謝している。

注

- 1) U. S. Census Bureau 2010 によると、City of Urbana (アーバナ) は人口41,250人、City of Champaign (シャンペーン) は人口81,055人、あわせて122,305人、両市の日本人人口は372人である。この論文でシャンペーンと記す場合は、シャンペーン市をさし、Champaign County は、シャンペーン郡と記す。また、Urbana-Champaign を略して U-C と記す場合もある。現地では、団体、個人によって、Champaign-Urbana という場合も多い。
- 2) 住民が主体となるメディアは、先行研究においても、筆者の調査地においても、文脈によってさまざまな用語が使われ、次のような意味を含むことが多い。たとえば、市民メディアは、住民、市民が主体となるメディアであるが、なかでもコミュニティ・メディアは、特定の地域、場所、コミュニティに拠点を置く。オルタナティブ・メディアや独立系メディア (Independent Media) は、マスメディアや国家による権力統制、集中型のメディアからは独立し、それとは異なる立場、機能をもつ。ハイパーローカル・メディア (西川 2013a) は、地方よりもさらに小さな地域、局所的な場所を起点としている。本研究でも、場合によって、コミュニティ・メディア、地域メディア、ハイパーローカル・メディア、といった用語を用いる。なお、筆者は、草の根運動において利用され生み出されるメディアを総称して Grassroots Media (草の根メディア) と呼ぶこともある。
- 3) アメリカ連邦通信法においては、ケーブルテレビの事業者は、地域からの要請があれば、「市民用 (public)、教育用 (educational)、自治体用 (governmental) の3種類のコミュニティ・アクセス・チャンネル (PEG チャンネル) を保障するよう」に定めている (津田 2011: 75)。こうした制度は、「1980年代にケーブルテレビの発達とともに、市民の声を反映させるためのパブリックアクセスチャンネルを求める運動が広がり、FCC (連邦通信委員会) によって法制化された」(白石 2011: 31)。なお、Urbana Public TV の番組は、チャンネル 6 (Comcast) とチャンネル 99 (AT & T Universe) で放送され、また UPTV の website でも公開されている (UPTV 公式サイト参照)。
- 4) イリノイ大学 U-C 校、メディア学部の放送局 WILL は、ラジオ、テレビ、オンライン放送を行っている。大学のメディア教育の一環であり、また全国ネットワークである NPR (National Public Radio) プログラムを

- カバーする一方で、地域とも連携している。イリノイ大学のキャンパスには、視力に障がいがある人々を対象とした放送局 Illinois Radio Reader もある。(西川 2013a : 146)
- 5) ビオトープとは、「生物の棲息に適した小さな場所」を意味し、より小規模で具体的な生態系や環境をさし(水越 2005 : 66)、メディア・ビオトープとは、メディアと人間の関係や、それをコミュニケーション空間としてとらえるため、生物生態系をメディアの生態系と置き換えた隠喩である。水越は生態学的なビオトープの特色に照らし、メディア・ビオトープの展望を4点にまとめている(水越 2005 : 80-86)。第1に、私たちが扱うことができる規模の小さなメディアに着目してメディアの生態系をとらえ、地域やコミュニティに根ざしたメディアを考えていく視座をもつ。第2に、メディア・ビオトープは、小さなメディアがネットワーク化して展開していく戦略を組み込んでいる。第3に、国家的なマスメディアでもなく、個人の自閉的な趣味のメディアでもない、私たちとメディアの新たな関係性を示唆してくれる。第4にメディア・ビオトープを生みだしていくための仕組みや道具、素材を具体的に考えメディア実践の知見と理論を充実させる必要がある。
- 6) 水越(2011 : 30)では、メディア表現者(media expressionist)を、次のように説明している。「近年デジタル・メディアを活用し、自己表現、地域の活性化、公共的サービスなどのためにメディアの送り手・生産者になろうとする一般市民が著しく増えている。メディア表現者とは、そのようなかたちでメディアに関わる人間像のこと。SNS やツイッターを楽しむ人々から反体制、反マスメディアの旗印が鮮明なメディア・アクティビストまでをゆるく内包する言葉」。
- 7) イリノイ大学 Urbana-Champaign 校の2010-2013年の各秋学期の日本人在籍者(学部生、大学院生、研究者)は、90人、74人、69人、58人である(Student Enrollment Reports, Illinois University at U-C Website)。なお、2012-13年度在籍者学生総数は44,520人である(FACTS 2012-13, 同上)
- 8) Center for East Asian Pacific Studies, Japan House, Asian Educational Media Service, Asian American Cultural Center, Illinis Japanese Association, など。
- 9) ユーザー層を市区町村単位でみてゆくと、京都市が最も多く20.08%、アーバナ・シャンペーンは合わせて17.79%である。京都からのアクセスが多いのは、番組スタッフの西川と立石尚史氏が京都在住であることによると思われる。とくに立石氏が自分のブログやTwitterなどでHarukana Showを紹介することで、氏の活動拠点である京都の知人が番組サイトに興味をもつという場合も多いと考えられる。サイト制作のためのアクセスは統計に含まれていない。
- 10) 出演者は、Rayの友人やローカルなバンドグループから全国的に有名なアーティスト、たとえばアメリカの作家 Nikki Giovanni (1943年生まれ、アメリカ在住の詩人、作家、活動家)まで幅広い(“Exclusive Inter-view with Nikki Giovanni [Snippet]”, 2012年3月17日 You Tube 公開)。Rayが番組のなかでニュースキャスター風に一人で話す場合もある。音楽やパフォーマンスのジャンルも、ヒップホップや、ロック、ジャズ、アカペラ(“Chai-Town [Snippet]”, 2013年4月25日公開)、サルサダンス、詩の朗読(“S. P. E. A. K. CAFE [Snippet]”, 2013年3月25日公開)など、多岐にわたる。
- 11) “Trayvon Martin” by Raymond Morales (2012年3月23日 You Tube 公開)
- 12) Rayは、2014年1月現在は、学位取得に向けての最終的な準備に忙しいが、The Show 以外のWRFUのラジオ番組には出演をしている。筆者からの問い合わせにたいして彼からのメールでの返信によると、2014年2月から、アーバナ・シャンペーン詩の朗読パフォーマンスの撮影に向けて新たなメディア・アート・プロジェクトに関わる予定である。次なるThe Showの展開は、就職場所による、とのことである。
- 13) “January 2013 Member of the Moth: Neil Parthun”, UPTV website より。
- 14) 2013年には、Neil Parthunの署名入りで5本の記事(“Peter Norman and the 45th Anniversary of the 68th Olympics” posted November 2013, “Jason Collins”, May 2013, “Hugo Chaves and Yewri Guillen”, April 2013, “The National Hockey League Lockout”, January 2013)、2012年には9本、2011年3本、2010年5本、2009年10本、2008年5本の記事を投稿している。
- 15) 通信企業にとってPACは余分な出費であり、「独自の立法によって巨大ケーブル・通信企業を優遇する州が多数になり、パブリック・アクセスが骨抜きになる事態が進行している」(津田 2011 : 81)。こうしたアメリカにおけるパブリック・アクセスの現状についての詳細は、魚住(2008 : 240-245)参照。
- 16) NPOのコミュニティラジオ局であっても、運営、番組制作方針は一樣ではない。番組担当希望者が多いラジオ局では視聴者のニーズ等を考慮して放送番組を選択せざるをえない場合もある(西川 2013a : 137)。
- 17) 「高卒の資格を有し、大学などに在籍しているか軍に所属していること、犯罪歴がないことなどが条件とされており、救済対象者は約80万人と見積もられている」(久保, 他編著 2012 : viii)
- 18) Member of the Month: Ricardo Diaz, UPTV website より。
- 19) C-U Immigration Forumは、2013年9月には、City of Champaign と City of Urbana が主催する第11回 The C-U International Humanitarian Awards の2013 Organizational Award を受賞している。
- 20) Harukana Show org. 制作, “harukana show”, 2012年4月14日 You Tube 公開, “Radio Space’s presentation at the Grassroots Radio Conference”, 2012年9月5日 You Tube 公開。また、筆者が渡米した際には番組の様子をビデオカメラでも撮影し、その映像を筆者の勤務校である甲南大学で担当している「メディア文化論」の講義で教材として利用している。同講義時間中には、

在米番組スタッフと教室 PC をインターネット通話サービスによってつなぎ、その画面を教室のスクリーンに映し出し、教室で学生たちがアメリカからの話者と会話し、Harukana Show を疑似体験することもある。受講生は、グループでラジオ番組を制作し、一部を WRFU からアーバナ・シャンペーンに実際に放送している。

- 21) Zine 作りにあたっては、UCIMC 内にある Zine Library や、そこでのプロジェクト・グループが主催するアメリカ中西部の Zine Fest を見学し、関係者に Harukana Show に出演してもらうなどして刺激を受けた。また Harukana Show では、日本在住スタッフである立石尚史氏が、フリーペーパーや Zine 作りの実践者であり、氏が制作した Zine や番組のなかでのトークが、『*Grassroots Media Zine*』制作の手引きになった。また、創刊号の内容は、西川 2013b を英訳し、次の3点を大幅に加筆修正している。第1に、筆者のアメリカでのメディア実践が、ロンドンの1960年代の活動家たちへの取材、とくにメディア・アクティビストでもある John Hoppy Hopkins からの影響を受けていること、第2に、2011年3月11日の東日本大震災発生から間もない4月に、海外で日本に関する番組を開始する際に筆者が考えたこと、第3に、日米をオンラインでつなぐコミュニティラジオ番組がどのようなメディア空間を生み出しているのかを、Harukana Show を機材担当として支えてきた Thomas Garza 氏と議論しながら内容を加えた。
- 22) Harukana Show Podcast No. 128, September 6, 2013 「大学、地域、世代と文化の多様性をつなぐ Great Job, with Jason さん」
- 23) Asian Educational Media Service (AEMS), Krannert Center for Performing Arts, Spurlock Museum, Krannert Art Museum, Center for World Music など。
- 24) 筆者が Jason と出会ったのは、WRFU で番組を開始する以前のことであり、2010年11月に UCIMC で行われた Jason が企画した “Tatsuya Nakanishi Performance & Workshop” においてである。2011年4月に Harukana Show を始めると、AMES が主催する Asian LENS や、AAS (The Association for Asian Studies) の Film Expo について、とくに彼が選んだ日本映画について話を伺うために、しばしば Jason を訪ねた (Mugichan blog, September 10, 2013 「人と場所と時間をつなぐ達人とローカルメディア from Jason さんのお話」)。この論文で述べた Ray の The Show にも、Jason がパーカシオニストとして出演している。大学職員として地域コミュニティと大学をつなぐアウトリーチの仕事 (地域の図書館での映画上映など) に携わるだけでなく、自らが地域に入り込み、アート・パフォーマンスを展開し、多様な立場の人々をつなぐ架け橋となっている。
- 25) WEFT90.1FM, Fanfare for The Speeding Bullet (日曜日夜 8 時~10 時),

参考文献・資料

文献

金山勉, 魚住真司編著

・2011 『「知る権利」と「伝える権利」のためのテレビ—日本版 FCC とパブリックアクセスの時代—』花伝社

久保文明, 松岡泰, 西山隆行, 東京財団「現代アメリカ」プロジェクト編著

・2012 『マイノリティが変えるアメリカ政治—多民族社会の現状と将来』NTT 出版

水越伸

・2005 『メディア・ビオトープ—メディアの生態系をデザインする』紀伊國屋書店

・2011 『21世紀メディア論』放送大学教育振興会

西川麦子

・2009 「ロンドン、ハマースミスにおける住民の活動の場としての『地域』の創出—情報のネットワークと個人の選択を基盤としたレジデント・アソシエーション—」『甲南大學紀要文学編』No. 156, pp. 145-176

・2010 「Creation of “Community” for Residents’ Activities in Hammersmith, London: Residents’ Association Based on Information Network and Individual Choice」『甲南大學紀要文学編』No. 160, pp. 179-197

・2012 「コミュニティラジオをグローバルに開く—アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP の日本語番組の試み」『甲南大學紀要文学編』No. 162, pp. 51-68

・2013a 「運動としてのコミュニティ・メディア—アメリカ、イリノイ州、WRFU-LP とグローバルなネットワーク—」『甲南大學紀要文学編』No. 162, pp. 133-152

・2013b 「多文化接触のメディア空間—米国のコミュニティラジオから」『世界思想』40号, 2013年春, 世界思想社, pp. 18-21

・2013c “A Media Space for Cultural Exchange: Exploring Community Radio in the United States”, in *Grassroots Media Zine* No. 1, Harukana Show.org., Urbana-Champaign, USA, pp. 1-18, PDF 版: <http://harukanashow.org/archives/1879>

白石草

・2011 『メディアをつくる—「小さな声」を伝えるために』岩波ブックレット823, 岩波書店

津田正夫

・2011 「転換期のパブリック・アクセス—アメリカ」金山勉・津田正夫編『ネット時代のパブリック・アクセス』世界思想社, pp. 71-84

魚住真司

・2008 「米国パブリック・アクセスの伝統とその現在」津田正夫・魚住真司編『メディア・ルネサンス—市民社会とメディア再生』風媒社, pp. 221-247

参考資料 (電子版)

Harukana Show

・“harukana show” (video), April 14, 2012, <https://www.youtube.com/watch?v=-rSSN4bgcds>

- ・ “Radio Space’s presentation at the Grassroots Radio Conference” (video), September 5, 2012, <https://www.youtube.com/watch?v=BD2FWRuKJys>.
 - ・ 「大学、地域、世代と文化の多様性をつなぐ Great Job, with Jason さん」, Podcast No. 128 September 6, 2013, <http://harukanashow.org/archives/1827>
 - ・ 「人と場所と時間をつなぐ達人とローカルメディア from Jason さんのお話」, Mugi-chan blog, September 10, 2013, <http://harukanashow.org/archives/1837>
- 西山隆行
- ・ 論点・視点「アメリカ移民法改革の動向」NHK 解説委員会, 解説アーカイブ, <http://www.nhk.or.jp/kaisetsu-blog/400/164824.html>
- Public i**, published by Urbana Champaign Independent Media Center
- Chynoweth, Daniell
- ・ “WRFU Raises Tower Now Reaching Entire Community”, January 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49415>
- Esbenshade, Richard
- ・ “C-U Marches for Immigration Reform”, May 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49694>
 - ・ “C-U Immigration Forum Steps Up Push for Comprehensive Immigration Reform”, August 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49883>
- Dolarin, Brian
- ・ “Champaign-Urbana Rallies for Immigration Reform”, August 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49989>
- Parthun, Neil
- ・ “Peter Norman and the 45th Anniversary of the ‘68 Olympics”, November 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=50104>
 - ・ “Jason Collins”, May 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49739>
 - ・ “Hugo Chavez and Yewri Guillen” April 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49630>
 - ・ “The NHL Lockout”, January 2013, <http://publici.ucimc.org/?p=49442>
- The Daily Illini**, The Independent newspaper at the University of Illinois since 1871
- Black, Eleanor
- ・ “Decatur ‘pilgrims’ urge Rep. Rodney Davis to support immigration reform in Taylorville”, October 7, 2013, http://www.dailyillini.com/news/local/article_d209116a-2ee5-11e3-b325-001a4bcf6878.html
- Weber, Ryan
- ・ “Local rally sheds light on ‘difficult’ path to citizenship”, April 11, 2013, http://www.dailyillini.com/news/local/article_8a831caba258-11e2-81b5-001a4bcf6878.html
- The News Gazette**, a daily newspaper serving east central Illinois
- Des Garennes, Christine
- ・ “Immigrant aid program needs donors”, August 11, 2013, <http://www.news-gazette.com/news/local/2013-11-08/immigrant-aid-program-needs-donors.html>
- Kacich, Tom
- ・ “Groups seek support on immigration reform from Davis”, August 20, 2013, <http://www.news-gazette.com/news/local/2013-08-20/groups-seek-support-immigration-reform-davis.html>
- Howie, Mike
- ・ “Text of letter delivered to Davis’ office on immigration”, August 20, 2013, <http://www.news-gazette.com/news/local/2013-08-20/text-letter-delivered-davis-office-immigration.html>
- Mitchell, Tim
- ・ “Illegal immigrants’ licenses won’t come cheap”, February 17, 2013, <http://www.news-gazette.com/news/local/2013-02-17/illegal-immigrants-licenses-wont-come-cheap.html>
- The Show (video) by Raymond Morales**
- ・ “Exclusive Interview with Nikki Giovanni (Snippet)”, March 17, 2012, <http://www.youtube.com/watch?v=mZMG5DFVs0k>
 - ・ “Trayvon Martin”, March 23, 2013, <http://www.youtube.com/watch?v=x4P-HXdUN5g>
 - ・ “S. P. E. A. K. CAFE [Snippet]”, March 25, 2013, <http://www.youtube.com/watch?v=03i6SLIzGNA>
 - ・ “Chai-Town [Snippet]”, April 25, 2013, <http://www.youtube.com/watch?v=Z0g2qHbucWE>
- University Illinois at Urbana-Champaign**
- ・ FACT 2012-2013, <http://illinois.edu/about/overview/facts/facts.html>
 - ・ Student Enrollment Reports, <http://www.dmi.illinois.edu/stuenr/#abstract1>
- Urbana Public TV**
- ・ “January 2013 Member of the Month: Neil Parthun”, January 2013, <http://urbanapublictelevision.org/momjanuary2013>
 - ・ “Member of the Month: Ricardo Diaz”, April 2013, <http://urbanapublictelevision.org/momjuly2013>
- U.S. Census Bureau**
- ・ 2010 Demographic Profile Data: Urbana, IL, <http://urbanailinois.us/sites/default/files/attachments/2010-urbana-dp1-table.pdf>
 - ・ 2010 Demographic Profile Data: Champaign, IL, http://ci.champaign.il.us/cms/wp-content/uploads/2012/02/2010-Census-General-Profile_Champaign.pdf
- 参照 URL**
- C-U Immigration Forum : http://immigration-forum.blogspot.jp/p/learn-more_2121.html
- Fanfare for The Speeding Bullet : <http://spinitron.com/radio/playlist.php?station=weft&showid=32>
- Harukana Show : <http://harukanashow.org>

Not Another Sports Show :

<http://notanothersportsshow.podbean.com/2010/12/>

The Public i, In Print (Archive) :

http://publici.ucimc.org/?page_id=1641

The Show – Politics & Bullspit :

<http://www.theshow1045.com>

The United Wrestling Show :

<http://untitledwrestlingshow.podbean.com/>

UI-7 Cable Television Channel :

<http://media.illinois.edu/service/ui7>

University Illinois at Urbana-Champaign : <http://illinois.edu/>

Urbana-Champaign Independent Media Center :

<http://www.ucimc.org>

Urbana Public Television :

<http://www.urbanapublictelevision.org>

WICD : <http://www.wicd15.com>

WCIA : <http://www.illinoishomepage.net/home>

最終アクセス : 2014年 1 月23日

表1 Harukana Show Podcast No. 96-147 (2013年1月25日～2014年1月10日)

* Podcast No. 1-42 は、西川 2010、Podcast No. 43-95 は、西川 2013a に掲載

** U.S.A.: Urbana (Illinois), St. Louis (Missouri), Japan: Kyoto, Kobe, Tokyo, France: Albi, 番組 Host: Mugiko, Cohost: Ryuta, Tamaki, Mike (from U.S.A.), Tateishi, Tsujino (from Japan), 機材担当: Tom (from U.S.A)

番組 No	年月日	Podcast No*	Podcast 内容	出演場所**
96	130125	96-1	「変わり種恵方巻」& アナログな時間	Urbana, Kyoto
		96-2	U-C イベント情報	
		96-3	スロークッカーとスープな話	
97	130201	97-1	U-C イベント情報	Urbana, Kyoto, Tokyo
		97-2	Toshiko さんトーク(1) 東京では雪で多難な成人式	
		97-3	Toshiko さんトーク(2) 娘さんの大学受験	
98	130208	98-1	U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		98-2	秋田県能代市から U-C へ、弁護士池上さんのお話	
99	130215	99-1	音楽情報と U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		99-2	冷えとりトーク/ Tateishi	
100	130222	100-1	Alex さんからのメール& イベント情報	Urbana, Kyoto
		100-2	日米の大学図書館と公共図書館/ Yukinori	
101	130301	101-1	移動図書館, 復興の書店, 第5回 Japan Café	Urbana, Kyoto
		101-2	Read Across America, 日本語で読み聞かせ (Saiko, Miharu, Chiharu)	
102	130308	102-1	イベント情報, Read Across America レポート, それぞれの言葉, 表現で	Urbana, Kyoto
		102-2	「えっちゃんの昔話」/ Estuko & Miwako	
103	130315	103-1	臨時災害放送曲 FM あおぞら, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		103-2	Japan Café, すでに5回!/ Washitake	
104	130322	104-1	Nao さん, Ise さんからのメッセージ, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto, Tokyo
		104-2	Yukako さんのタンザニア体験記	
105	130329	105-1	京都は桜満開, U-C ほか雪& イベント情報	Urbana, Kyoto,
		105-2	Tateishi さん, 心身も DIY, 鍼灸に通う	
		105-3	Tamaki さん, アメリカにも SPA!	
106	130405	106-1	花見のブルーシート& イベント情報	Urbana, Kyoto
		106-2	Matsuri Talk with J-Net/ Chudan, Sara, Sude, Alan	
107	130412	107-1	地震, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		107-2	『ゴジラ』(1954) がシャンペーンにやってくる	
108	130419	108-1	U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		108-2	春の夜空の素敵なお話一星を見る会 (CUAS) / Saiko	
		108-3	春の星と世界の神話/ Saiko	
109	130426	109-1	「昭和の日」, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		109-2	なんだか, おかしい, シューカツ	
110	130503	110-1	「憲法記念日」, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		110-2	Satomi さんとハーブなお話	
111	130510	111-1	母の日, 祝卒業! Hwungsoo さん紹介, イベント情報	Urbana, Kyoto
		111-2	Diner はなぜ, 日本に輸入されなかったのか? / Tateishi	
		111-3	アメリカの Diner は元祖ファミレス?	
112	130517	112-1	日本語で歌う洋楽アーティスト, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		112-2&3	Saiko さんの星トーク	
113	130524	113-1	Memorial Day, バーベキュー, イベント情報	Urbana, Kyoto
		113-2	Football Activist Zine, No. 1 できました! ZINE と DIY なお話/ Tateishi	
114	130531	114-1	ダイナーはメタル系? & U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		114-2&3	ラジオ番組を作ろう! with Tom さん, 聞き手& 通訳 Ryuta さん	
115	130607	115-1	カラ梅雨と梅酒, イベント情報, No. 114-2 & 3 へ「メディア文化論」受講生からのコメント	Urbana, Kyoto, Kobe
		115-2	せんだいメディアテーク一人がアクティブになれる場所/ Tateishi	
116	130614	116-1	「ラジカルラジオ」とのコラボ! Kiyokazu さんと Iwakawa さんをお迎えして	Urbana, Kyoto
		116-2	鷺田清一さんトーク(1) バンド少年だった頃, 細い髪が肩まで伸びて……	
		116-3	U-C イベント情報	
117	130621	117-1	『想像ラジオ』& U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		117-2	鷺田清一さんトーク(2) 「3.11から」	
		117-3	鷺田清一さんトーク(3) 「せんだいメディアテーク」壁がない, 市民が主体の記録, 表現装置	
		117-4	smt とコラボできたらいいなプロジェクト/ Ryuta & Mugiko	
118	130628	118-1	U-C イベント情報, ハナレグミ「家族の風景」	Urbana, Kyoto
		118-2	週末にパンケーキでゆっくり, 朝食& ブランチを	
119	130705	119-1	七夕, かき氷, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto, Kobe
		119-2	戸惑う男子とパンケーキ話-Harukana Show Talk Bandand (HSTB)	
		119-3	ホットケーキは, パンケーキ? / Tamaki	
120	130712	120-1	子供の頃から苦瓜, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto, Kobe
		120-2	「忌野清志郎にささげるレクイエム」今, だから, 「サマータイム・ブルース」/ リクオ	
		120-3	インディーズな時代/ リクオ	
121	130719	121-1	U-C イベント情報, 祇園祭り	Urbana, Kyoto, Kobe
		121-2	70年代, 「アメリカ音楽」としての日本のブルーグラス, 参加, 表現しつなげる音楽/ Banjo	
		121-3	アメリカのブルーグラスの始まり, 楽器/ Banjo	

番組 No	年月日	Podcast No	Podcast 内容	出演場所**
122	130726	122-1	「天神祭とギャルみこし」, U-C イベント情報	Urbana, Kyoto, Kobe
		122-2	Ryuta さんの日本話, Cultural Typhoon と「自由ラジオ」	
123	130802	123-1	青春18切符, 「温泉の上手な入り方」/Hiraoka, Takeuch, Kimura	Urbana, Kyoto, Kobe
		123-2	U-C イベント情報, Mike さん横浜話	
		123-3	日本滞在の試練と楽しみ方, Irish Music/Mike	
124	130809	124-1	旅の話題, U-C イベント情報, U-C へ新しく来られた方へ, 新生活を中古品で賢く	Urbana, Kobe
		124-2	Football Activist Zine No. 1, 「各社のジョギングシューズの特徴」/Abe, Nishimoto, Kawai	
		125-1	U-C イベント情報	
125	130816	125-2	獣医師から渡米し栄養学者へ, 米国は3人に1人が「肥満」!/Manabu	Urbana
		125-3	アメリカで肥満防止, 食物繊維をたっぷり, たんぱく質もバランスよく/Manabu	
		126-1	ルバーブジャムの作り方	
126	130823	126-2	U-C イベント情報	Urbana
		126-3	「鷲田清一のラジカルラジオ」& 作戦会議	
		127-1	映画話	
127	130830	127-2	U-C イベント情報, 新学期が始まってしまった	Urbana, Kyoto
		127-3	Urbana Public TV	
		128-1	アカトンボと U-C イベント情報	
128	130906	128-2	Jason さんトーク (前) イリノイ大学の秋学期, Jason さんプロデュースイベント	Urbana, Kyoto
		128-3	Jason さんトーク (後) 現代アート・パフォーマンス諸企画-大学, 地域, 世代, 多様な文化をつなぐチャレンジ	
		129-1	「100歳以上が…」& 「鈴虫トーク」	
129	130913	129-2	U-C イベント情報, 「お月見」と「落語」	Urbana, Kyoto, Kobe
		129-3	Japan Outreach Coordinator の活動, ランドセルはとってでもクール, 日本のビジネスマナーを伝えるのは難しい/Yoriko	
		130-1	台風18号, U-C イベント情報	
130	130920	130-2	日本の会社で OL/Tamaki	Urbana, Kyoto
		131-1	ツクツクボウシの鳴き方, U-C イベント情報	
131	130927	131-2&3	「ゆるキャララジオ」前・後半/Inoue, Kamei, Toyoshima, Furuno	Urbana, Kyoto, Kobe
132	131004	132-1	U-C イベント情報, 衝撃の10月	Urbana, Kyoto
133	131011	132-2&3	Jason さんのルーツをたどる日本旅(1)天下の台所大阪から鳥取へ	Urbana, Kyoto
		133-1	U-C イベント情報	
		133-2&3	Jason さんのルーツをたどる日本旅(2)鳥根, 京都, そしてアメリカで	
134	131018	134-1	U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		134-2	父とゆくロンドン旅/Tateishi	
		134-3	トークへのコメント	
135	131125	135-1	Alex さんからの手紙& U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		135-2	「デイストロ」って? 流通も DIY/Tateishi	
		135-3	トークのコメント/Ryuta & Mugiko	
136	121101	136-1	11月になりましたね, イベント情報	Urbana, Kyoto
		136-2	Grassroots Media Zine トーク (前半)	
		136-3	Grassroots Media Zine トーク (後半)	
137	131108	137-1	自宅でのお葬式は大忙し	Urbana, Kyoto
		137-2	U-C イベント情報	
		137-3	新名所? ニックな日々と東屋と和菓子/Tamaki	
138	131115	138-1	Alex さんと KPOP & U-C イベント情報	Urbana, Kyoto
		138-2	和菓子で季節をアート/Tamaki	
139	131122	139-1	Thanksgiving はアメフト観戦, 増えすぎた市民マラソン「2005年問題」	Urbana, Kyoto
		139-2	リクオトーク(1)グラスルーツなライブ企画が増えたのは?	
		139-3	リクオトーク(2)発信ツールは増えただけで, 友達の小さな輪	
140	131129	140-1	春夏秋冬靴下を重ね冷えとり男子/Tateishi	Urbana, Kyoto
		140-2	神戸マラソンはこんなに楽しい!/Tateishi	
		140-3	個人の趣向の細分化, 異業種コラボの多機能カフェ, 本屋/Tateishi	
141	131206	141-1	とってもうれしかった事! From Alex & ショッピングの季節	Urbana, St. Louis, Kyoto, Kobe
		141-2	Harukana Show 年末座談会: Media Rocco ~自分たちでメディアをつくる/Tusjino	
142	131213	142-1	142-1 シューカツの始まり, 男子ファッション編~戸惑いながらそれぞれのスタンス/HSTB	Urbana, St. Louis, Kyoto, Kobe
		142-2	Harukana Show 年末座談会 (後半) コミュニティメディアのその次	
143	131220	143-1	イマドキの若者のクリスマス話/HSTB	Urbana, St. Louis, Kyoto, Kobe
		143-2	シューカツ女子ファッション編/HSTB	
144	131227	144-1	餡入り餅のお雑煮, 今年も巫女さんのバイト/HSTB	Urbana, St. Louis, Tokyo
		144-2	U-C イベント情報	
		144-3	親からみたシューカツ/Toshiko from Nerima-ku, Tokyo	
145	140103	145-1	St. Louis でピリケンさんに会えなかった話	Urbana, St. Louis
		145-2	新年のお料理はタンシチュー?	
		145-3	Tom さんに PACA の Preservation, Conservation, Salvage について聞きました	
146	140110	146-1	大寒波, 大雪のシャンペーン, セント・ルイスから	Urbana, St. Louis, Kyoto, Albi
		146-2&3	フランスの学年暦は3分の1が休暇, Albi での子育て, 濃厚な“家族”付き合い/Sayaka	
147	140117	147-1	韓国の Alex さん, 感無量, いきなり新年に!	Urbana, St. Louis, Kyoto, Albi
		147-2	日仏の保育所はこんなに違う, 給食にブルーチーズ, みそ汁苦手な Yuta くん	
		147-3	U-C イベント情報	